

NAHB（全米ホームビルダー協会）が主催するIBS（インターナショナルビルダーズ・ショー）は2月7日～10日、アメリカ・フロリダ州で開催した。約1800社が出展、10万人が来場した世界最大規模の見本市から透けて見える建材・設備のトレンド、流通の変化などを、(有)和建築設計事務所（長野県）の青木和壽さんに解説してもらった。

10年以上前、IBS ストが高いか安いかは、（インターナショナルビルダーズ・ショー）には、よって変わる。具体的に日本の工務店・ビルダーは木製サッシ（サッシ）、ドア、調理機器、現在の経費削減の影響もあつてか、北米への視察はひと頃よりも少なくなつたようだ。

海外視察のよきは、単に建材・設備の情報を入手できることだけではない。グローバルな社会状況やトレンドを知り、将来への対応を検討する機会になる。日本国内にいたるだけは見えないもの、見えたりもする。

2007年2月、IBSをはじめ北米の住宅関連動向を視察し、家を提案する者として考えたことをまとめてみた。

●何を検討したら良いか

IBSでは、機能やデザインにおいて、日本国内でも活用できる建材・設備があつた。

輸入建材のメリットは機能と性能・デザインにあると思つているが、コ

●木製サッシの動向

北米ではハリケーン対策用の窓がある。窓に合わせガラスを組み入れて強化したものの、ガラスと窓枠補強を施したものが、ハリケーンの影響を受ける地域ごとに設定されている。このハリケーン対応サッシは、日本でも、

台風など風害のある地域には有効であろう。

北米のサッシメーカーはこれまで、高級な住宅をターゲットとしてきたが、より多くの市場を開拓するため、素材を替えてコストを低減した製品も出している。窓のデザインは限定されるが、新素材を導入した製品で、日本でも人手できるものがある（マービン社・ベラ社など）。

IBSでは、従来のファイバーグラス素材と木を組み合わせたものや、ファイバーグラス素材のみとして15%程度コストを低減したものの（インテグリティシリーズAL・ULTRIX）などの展示があつた。

●日本の防火認定対応

後日、ミネソタ州ワロード市にあるマーヴィン社工場で、日本の防火窓の認定を受けた木製サッシの製作ラインを視察した。

取り付けを容易に行つていた。ガラスは透明防火ガラスである。基本的にマーヴィン社は受注生産であるため、こうした対応を可能にしている。

既存のステンドガラスを日本で組み込むことができるサッシが、既存のサッシと対応できるのか、ステンドガラスの重さによる対応が必要かを即答し、現在の製作ラインで対応できることを確認できた。

防風・防火性能高まる木製サッシ

需要開拓へファイバーグラス製も



マーヴィン・ウインドウズの特注製作丸窓



マーヴィン・ウインドウズの特注製作ドア（開き折れドア）

また、アンダーセン社では光触媒の技術を取り入れ、太陽光の当たる場所で浄化作用を発揮するガラスを導入し、木製サッシの付加価値としてアピールしていた。

通常のサッシの製作ラインで、スタンダードなサッシと合わせて製作されている。日本向けの特別なラインではないにもかかわらず、防火窓に必要なガラス止め金物や発砲ゴム、厚みを確保するための木材パーツの

青木和壽
(あおき・かずとし)
(有)和建築設計事務所代表
長野県塩尻市
☎ 0263-51-0318
http://www.kazu-design.co.jp

建材・設備のトレンド

3

木材調達

●青木和壽
[和建築設計事務所]

I・B・S（インターナショナルビルダーズショー）をはじめとする北米住宅市場の視察記。最終回となる3回目は木材調達についてで、良質の材料が今後も安定して入手できるかどうか、現地でも懸念があるという。和建築設計事務所（長野県）の青木和壽さんに報告してもらおう。



青木和壽
(あおき・かずとし)
和建築設計事務所
代表
長野県塩尻市
☎0263-51-0318
<http://www.kazu-design.co.jp>

今回、I・B・S（インターナショナルビルダーズショー）と北米の住宅市場を視察して、自分が取り組んでいる家づくりの方向性を再考する機会を

●木材流通の変化

10年ほど前のNAHB（木材調達のことを書いてみたい。樹脂系の木材代替材や、

樹脂と木材との混合建材が目立った。

メンテナンスフリーで、リサイクルが可能という材料だ。

乱伐や違法伐採の防止、計画的な材料の供給といった面から考えると、新しい素材の需要は、

これから多くなるかもしれない。

また、今回の視察ではアメリカ・ミネアポリス湖畔の高級住宅の施工現場で現地のビルダーと話す機会があり、そこでも気があった。

現場は枠組壁工法（ツバーフォー工法）の住宅で、ちょうど内部のド

ライウォールを施工していたところ。フレミングが見える状況であり、内部ボード張りの不陸調整のために、パッキング材をたて枠に数多く取り付けているのが印象的だった。

そのビルダーの話によると、最近、ランバー材の品質を心配しているとのこと。反りや曲がりに対応できるよう、パッキング材を取り付けているということだった。いまのところランバー材の供給は安定しているが、品質もこのまま安定しているかどうかは懸念していると話してくれた。



●国産材の見直し

前回は触れたが、日本では国際的な木材流通の変動から、輸入木材や輸入合板の供給がひっ迫。コストが上昇を続けているという問題がある。輸入材の単価が上昇して国産材との差額が縮まったために、いま再び、国産材が見直されてきた。

最近ではツーバイフォー工法向けに国産構造材、あるいは国産構造用合板を研究開発する動きも活発化している。

国産材の普及には行政も目標を掲げ、在来工法住宅における使用比率を現在の3割から10年後に6割までに引き上げることを目標にしている（林野庁・木材産業の体制整備及び国産材の利用拡大に向けた基本方針）。

中央行政が国産材の活用に向けた取り組み姿



国産材の外壁材を使用した例。信州カラマツの無垢サイディング

樹脂と木材を混合した新素材が目立つ ランバー材の品質安定も課題に

勢を示していることから、今後、地域の工務店や設計事務所にも、国産材活用の動きは波及してくるだろう。



国産材の構造。信州カラマツと東濃ヒノキ

私は4年前から長野県生産・供給のしくみを構産材を活用した住宅の設計に取り組んできたが、北米で現場の話を聞くなかで、今後、海外からの木材に依存しなくてもよい家づくりを進める必要はあると感じた。

地方では、木材情報が首都圏や都市部よりも比較的豊富である。国際的な流通変化にとらわれず、ある程度小さな流通のなかで、信頼できる木を使っていくことが可能だ。

この利点をいかす住宅

検討していきたいと考えている。
（おわり）

この利点をいかす住宅